

第二期 第八十三号 (初版) (無料)

音信不通

本のビオトープ

学びあう人々のために

2023.06.10 定有堂書店 発行

昇降開合

猶、後哲を俟つ

定有堂を知らない子どもたち

「目的のある読書」への抵抗

本を作る側から (3)

汽水のほとりから (27)

『東京物語』を読み解く

消えゆくお店 続々

鳥取あれこれ その八十二

八代日記 (三十九)

鳥取になんか誰も来ない

おみやげ

ハジヤマの誘惑

…… 編集後記

奈良 敏行

石橋 毅史

しみずしゅうえい

岩田 直樹

村瀬 謙介

小原 修治

萩原 俊郎

ムラカミヒロミ

内田 克彦

齊藤 仁昭

三浦 永理

あきの素生

ドラマメリア



昇降開合

奈良 敏行

(定有堂 主人)

本屋でない人生なんて(2)

定有堂教室「ドウルーズを読む会」に参加した三砂慶明さん(「読書室」主宰)に、その後、「反哲学」という視点と、課題として「反本屋」という言葉を投げかけられた。「反本屋」はまだ手がかりもなく全くわからない。「反哲学」の方は『反哲学史』などの木田元の本を中心に読み進んでいる。

一月ほど前にMさんが『京都不案内』(森まゆみ)を貸してくれた。樹木気功の紹介がくわしいという理由だった。身体を氣遣つての思いやりだった。Mさんには共著で『レヅリエンス―よみがえる力』日本評論社があり、一読をすすめられた。レヅリエンスは、七年前に発足した『音信不通』の、初発衝動でもあった。汽水空港のモリテツヤさんも氣功が気になるとわたしに言った。津村喬さんがいいというので、『氣脈のエコロジー』と『氣功への道』を紹介した。

『反哲学史』は、「哲学」というのは西洋独自の思考様

式で、ソクラテスからヘーゲルまでの形而上学に過ぎないと明言する。ソクラテス以前には、自然（フュシス）に即して考える、フオアゾクラティカーという思想家たちがいた。そこでは神々でさえも同じ原理によって支配されていた。プラトンから神（理性）の支配がはじまる。自然（フュシス）は「気が聚（あつ）まればすなわち生、気が散ればすなわち死」（『氣脈のエコロジ』）という世界だ。津村喬は「見えない世界を見えるように語り、行動する」というのは（略）現実の秩序を否定して別の現実を作っているという場合だと述べる。そこには「存在を遊戯に変える」という美しい言葉もみえる。

モリテツヤさんはメールで「奈良さんは本屋という言葉の世界に生きながら、同時に太極拳を通じて「見えない世界」を感じて生きてこられた方なのだとこのことを改めて気付きました」と指摘した。

「見えない世界」、わたしが求めているのはそういうものだったのだろうか。言葉の届かない世界というのだろうか。言葉は世界を二極に分ける。分け続けて正解を出す。そこで多義性は許されない。むかしランボオを読んでいた頃、「弱いせいか強いせいか、とにかくおまえはそこにいる、それは強さというものだ」という弱さが導く啓示に、こころが震えたことがある。心神錯乱しても、身体が出口

まで、きつと運んでくれると解釈した。大洪水の後に身体が残る。そんな予言に思えた。

新型コロナの前は近くの袋川の土手をよく散策した。川の流れと葉枝のトンネルがつつぎ、身体が暖まると気功体操をする。疲れた身体に力がみなぎる。するとゆっくり太極拳をする。横を散歩者がすれ違うのだが、あまりにゆっくり動いているので気にならないらしい。こともなげにすれ違っていく。コロナが始まってからは、人通りの絶えたアーケードの下を歩くようになった。人の気配が蘇るのを待ちつつ歩けるように歩いた。終息が見えてきたこの頃、また土手に戻った。

「見えない世界」に身体を寄せるとき、「昇降開合」これだけを意識する。津村喬は「天地を軸として天に近づくのが昇、地に近づくのが降である。人間を軸として中心（丹田）から遠ざかるのが開、戻ってくるのが合である」と簡明に教える。これだけを目安に気功や太極拳につとめている。

太極拳は三十年ほど継続している。定有堂書店の二階にはレッスンス室もある。水・土と週に二回。先日ふとした思いつきで市役所新庁舎の二階ホールで水曜夜の部の練習会を催した。夜のガラスウォールの一方にJRの高架鉄道が走り、一方にはスタバの看板が見える。ここではなぜか

「見えない世界」と出会えると予感がした。以降水曜夜の練習所をここに移した。

ベージュ喫茶「森の生活者」は二階にありガラス窓越しに袋川の流が見える。女主人のお連れ合いのキノシタヒロシさんに「工手のこの流れと同じような世界がああホールにはあった」といったら、「奈良さんは流れが好きなんだ。側の高架にも鉄道が流れている。それにあのホールの設計には自分が関わった」と語った。工夫はガラスウォール、床から直接ガラス窓が立ち上がる。なるほどと思った。

そして自然そのものではなく、目に見える世界の裂け目として現れてくる自然（フュシス）に自分は惹かれていると気付いた。その扉は自分の身体感覚。身体が自分の存在を追い越そうとしている。

2023.05.13

三砂慶明 『千年の読書』 誠文堂新光社 2022

三砂慶明 『本屋という仕事』 世界思想社 2022

森まゆみ 『京都不案内』 世界思想社 2022

清水美香 他 『レヅリエンス—よみがえる力』 日本評論社 2023

論社 2023

津村喬 『気脈のエコロジー』 創元社 1993

津村喬 『気功への道』 創元社 1990

木田元 『反哲学史』 講談社学術文庫 2000
 アルテュール・ランボー 栗津則雄 『ランボオ全詩』 思潮社 1995



定有堂書店 「読む会」の展開
 街の読書運動の可能性

【講演・朗読】
 6/25(日) 13時
 12時30分 - 15時30分
 鳥取県立図書館2階 大研修室
 入場料 300円 ※定員超過時は抽選となります。抽選は当日12時30分頃に行われます。

【関連展覧】
 6/21(木) - 6/29(日)
 鳥取県立図書館1階 大研修室

定有堂書店 鳥取県立図書館2階 大研修室
 〒690-0192 鳥取県鳥取市東山町1-1-1
 TEL: 093-722-1111 FAX: 093-722-1112

会場 鳥取県立図書館
 6月25日(日)

猶、後哲を俟つ

石橋 毅史

(作家・出版ジャーナリスト)

定有堂書店が一九九八年に刊行した『伝えたいこと 濱崎洋三著作集』。この本を奈良良さんに教わったのは、はじめに定有堂を訪れた二〇一〇年のことだった。鳥取の郷土史家による、鳥取についての記述に紙数が割かれた作品だが、僕にとつては「定有堂」や「鳥取」を知るための参考資料にとどまらず、なにかあるたびに思いだし、ときには本文から引用もする座右の書のひとつとなった。

「文は人なり」を体現したような一冊である。見聞の広さと深さがうかがわれ、いうべきことを率直に、平易な言葉で語る。厳格さと寛大さを併せもっていて、読んでいて清々しい。僕は著者と面識がない。物故者だから永遠になわれない。それでも「会える」のが書物や文章のすごいところだ。

本書のなかで『猶、後哲を俟つ』という言葉が紹介されている。著者が敬愛する江戸時代後期の歴史家・岡島正義が『鳥府志』のなかでたびたび書いた一文という。意味するところは、本に挟まれていた片山正見さんの解説文がわ

かりやすい。どんなに史料をあたっても不明点の残った話推論を展開せざるを得なかった話、藩に仕える者として差し障りがあつて書けなかったことが含まれる話の末尾に、岡島はこの一文をつけた。後生の者たちに、誤りがあれば訂正すること、新たな史実を見つけ、新たな推論を生みだし、彼の文章を批判的にのり越えることを期待した。著者も、そのような姿勢で調べ、記し、若者たちに接することを心がけたという。

本は、どんなタイピングで出合うかも大きい。二〇一〇年当時、僕はフリーランスになりたてで、大きな指針を与えられたように感じた。自分も最後に「猶、後哲を俟つ」と記したい、つまり次の書き手がのり越えるべき対象となるような文章を書きたいと思った。それには、人の話をよく聞き、よく調べ、書くときは細心かつ大胆に……僕にとつて『伝えたいこと』は、後に続く者の背中を押す本、前向きで開放的な本なのである。

でも、一冊の本をどう扱うか、その本を通じてどんなメッセージを発するかは、人によって違う。

閉店が近づいた定有堂では、『伝えたいこと』と『橋田邦彦・現象学・アーレントの再解釈』（岩田直樹／小取金）が「最後に読んで欲しい本」として店内の各所に並べられていた。帯に挟まれた黄色のカードには、

《身の丈に完結している世界を、外部が解釈すると別のものになる》

と書かれてあった。

《インディペンデント・マインド。「伝えたいこと」は、
「大きな声でものをいう人間を信じるな…」》

とも。僕の『伝えたいこと』に対する受けとめかたとは
対照的に、慎重で、内向的だった。

奈良さんは、定有堂の閉店を報じようとする取材のすべてを断つたという。伝えきれない事実や真意があるし、当事者の大切な思いを「別のもの」にしないためにそつとしておいて、ということらしかった。閉店を報じるくらいなら岩田直樹さんの本を紹介してほしい、と。もつとも、奈良さんの取材拒否は閉店に際して初めて生じたものではない。僕は、いわゆる取材やインタビューで定有堂を訪れたことは一度もない。だったらお断りです、楽しく話すだけなら歓迎です、といつも釘を刺されてきたからだ。ただし、だからといって定有堂や奈良さんのことを書いたことがないかという、何度も書いてある。このあたりは、常に繊細なものがあつた。

最後のこのメッセージも、物書きとしてはやっぱり戸惑う。それでも、真意を考えてみるしかない。

定有堂の客は、地域の人たちだけではなかった。同業の

本屋、出版関係者なども、なにかを求めて遠方からやつて来た。閉店を知り、その前に、とすぐく久しぶりの人も初めての人も駆けつけ、それぞれの思いを胸に店を歩き、奈良さんと言葉を交わし、種を拾って帰った。その種はいずれそれぞれの場所で花を咲かせるだろうが、鳥取の人びとや全国の本好き、本屋好きが愛した定有堂とは、良くも悪くも「別のもの」になる。

奈良さんはもちろん、それらをわかっているはずだ。「身の丈に完結している世界をそのまま維持することは不可能であり、いくつもの外部に解釈され、別のものになることを避けられないとわかっているはずなのである。

はじめは対照的だと思つたが……奈良さんが発したメッセージの裏側には、《猶、後哲を俟つ》が貼りついているのではないか？

ひとまず、そう結論してみる。確信はない。これからも考えつづけるしかない。

各地を巡っていると、定有堂が唯一無二の書店であつたことにたびたび気づく。いっぽう、大阪や京都や東京で、ふと鳥取がよみがえる瞬間もある。似た気配をもつ店や人に、時どき出会うのだ。僕はこれからも定有堂について考え、機会を見つけては書くだろう。

定有堂を知らない子どもたち

しみずしようえい

(人文学研究)

定有堂という本屋があった、らしい。

鳥取のそこかしこで、老舗の本屋がつい最近、店じまいしてしまつたことを人々が噂し、惜しんでいた。店名らしき「ニュードー」という音だけが妙に頭にこびりついたまま、アーケード街をぼんやりと歩いていると、たしかにその店はある。平日の昼間からシャッターを固く閉ざして――

五月の大型連休の狭間、私は鳥取に流れ着いた。旅先で偶然に出会つた知己が、彼の住む鳥取に招いてくれたのだ。彼の家に滞在し、その仕事を手伝いつつ、彼の目を盗んで喫茶店や本屋に逃走した。そんな逃避行のなかで、長い歴史をもつというその店のことを知つたのだ。

アーケード街でその本屋を発見し、その掲示に目をやる。店で行われていた太極拳教室と読書会は存続しているらしかった。偶然にも「読書会ピオトープ」という会が二日後にあるという。参加させて頂くことにする。

当日、訪ねてみると、幅広い年代の参加者が十人ほど集

まっていた。力のこもつたレジュメを作ってきて下さつたHさんと司会のTさんを中心に会が進んでいく。参加者は細部の解釈から、読書や翻訳に対する考え方にいたるまで語り合う主題は多岐にわたつた。

その一方で、店主の奈良さんは、議論を先導するでも総括するでもなく、ただそれを見守るかのようにならしているばかりであった。主宰でありながら、ほとんど黙して流るるままに任せているその姿勢が妙に印象に残つた。帰り際に、奈良さんに後日改めてお話を伺えないか、と申し出ると快諾して下さいました。

祭り囃子と交通整理のアナウンスを浴びて、神輿や山車が商店街を行き交う日曜日。息を潜めるように佇む、木屋の二階に再びお邪魔した。

奈良さんが最初に見せて下さつたのは、「寺小屋雑誌」という勉強会の雑誌と、二十代のころに発行していたというミニコミ「音信不通」と「定有」であった。定有堂という空間の原型が、ガリ版刷りの文字の背後にあった。

その時代、大学は学生闘争のただ中であつた。バリケード、全学スト。授業どころではなかつた。

だが、無論、学生が皆、闘争に積極的であつたわけでは

はない。奈良さんも、高校時代から闘争に身を置いてきた活動家たちや、分裂を繰り返すセクトには馴染めなかった。

そんな青年の楽しみは、専ら喫茶店で本を読みつつ、同じ関心を持つていそうなほかの学生に声をかけて、話をすることだった。そのときに、自分の関心や思想を伝えるツールこそ本であり、ミニコミであった。開講されない授業の代わりに、そうして築かれていったつながりから勉強会に参加するようになるのは自然な流れだった。

闘争はやがて、自己否定的な論理と陰惨な暴力に覆い尽くされていく。大学紛争吹き荒れる半世紀前の学生にとつては、そのような「政治活動」から距離を置いて、バリケードの外で新たな関係と空間を作り上げていく、という選択もまた、ひとつの政治的態度であった。そこには、闘争からの自閉とオルタナティブな場の開拓という双方向的な力学が働いている。

かような、「身の丈に合った」空間のなかで語り合うという「寺小屋」とミニコミの思想は、そのまま定有堂書店に引き継がれた。ミニコミはかぎられたコミュニテイのなかで流通するが、たえず新しい読者に開かれていて、それが新たな関係を取り持つ。本屋は身の丈に完結した、閉じた空間であるが、たえず往来に開かれていて、路上に新た

な生き方を求めている。

往来に開かれているがゆえに、本屋は、たえず侵入者によって、内部から書き換えられていく。「外部から解釈する」までもなく、本屋は変化していったのだった。

しかし、ミニコミの原初的な欲望は、ただ自らが読み書き、それをまた自分で読むということの快楽に存する。それゆえ、ミニコミは内面に回帰していく、いうのもまた当然の帰結である。かくして、本屋は読書に迫り越され、音信不通となった。

すっかりあたりが暗くなるまで、奈良さんと話し込んでしまった。最後に、一階に降り、空っぽの棚が並ぶかつての店頭を見せて頂くと、そこは本屋の遺構であった。

いまや、定有堂書店は、歴史上の存在となった。「定有堂を知らない子どもたち」の第一世代たる私は、かつてゼンキョートーウンドーがあった、と言うのと全く同じ意味において、テュードローがあった、と言うのである。

定有堂について知らぬまま、「子どもたち」はテュードローについて語っていくであろう。本稿はそんな不作法の最初の例であったか。

定有堂書店は初めて、外部に直面している。

「目的のある読書」への抵抗

岩田 直樹（公立鳥取環境大学特任教授）

（「読む会」選書人）

國分功一郎『目的への抵抗―シリーズ哲学講話』（新潮新書、四月刊）を読んだ。『暇と退屈の倫理学』（朝日出版社二〇一一年、増補新版、太田出版二〇一五年）の続編である。読み進むうちに、奈良敏行さんの読書論を思い起こしていた。

三砂慶明さん主宰のウェブ「読書室」に、奈良さんが巻頭言「本にたすけられる」ことの福音を寄稿している。三砂さんの著書『千年の読書』（誠文堂新光社、二〇二二年）冒頭の一文「私は本に人生を何度も助けられてきました」（二頁）を系口に、「本にすくわれる」「本にたすけられる」を巡って考察が重ねられる。熟考の末に見出したのは三つの側面である。

「一、環境緊縛性からの離脱／二、シンボル体系の獲得／三、世界（存在）が開ける／本は「驚き」によって世界（存在）を開く、それは環境緊縛性から世界開示性への開かれでもあり、ときにそれが「自由」の体験であり、また「救い」でもある。」（「／」は改行）

そうか、三砂さんから奈良さんへ渡ったバトンは、「目的」談議を経ること、さらなる高みへ引き継がれていくのではないか。

「目的」の登場場面を想定してみよう。

「本プロジェクトの目的は何ですか」。プレゼンの最中にこんな質問をすると、あからさまに嫌な顔をされるに違いない。すでに走り始めている企画に水を差す発言だからである。空気を読め、というわけだ。

漠然とした質問も困りものである。周囲の人に「あなたの人生の目的は何ですか」と問いかけてみる。ほとんどの人は「何を言っているんだ」とスルーするだろう。「お前なんかに関われたくない」と怒り出すかもしれない。

もつと意地悪な質問「目的と目標の違いは？」もある。公教育の現場にいた私にとって、両者の峻別は教育行為の根幹に関わるものであった（どの仕事も多かれ少なかれ同様だろう）。しばしば話題に上がる校則の目的と目標は？私が担当していた数学教育の目的と目標は？等々。

前回と同様、「困ったときは『岩波 哲学・思想事典』（一九九八年）頼み」である。「目的」の項（大澤真幸執筆部分）を引用する（二五九頁）。「行為において行為者は、一定の未来の状況を先取的に表象し、その状況を実現することにおいて、ある期待された価値に到達しよう

うとする。〈目的〉とは、この、実現されるべく意図されている未来の状況において達成されるはずの価値のことである。「この後で大澤は、計画殺人という「目標」を実現することによって復讐という「目的」が達せられるという廣松渉の物騒な議論、さらには、ウェーバー行為論を現象学によって厳密化しようとしたシュッツの「目的動機（ゝのために）」、「理由動機（ゝだから）」を紹介する。

「目的」と「目標（手段）」の関係は実にややこしい。復讐が殺された者の鎮魂のためであれば、復讐は「目標」になる。もし、鎮魂の「目的」が生き残った者による精神的安寧の獲得であれば……。「目標」は無限度及して「目的」に到底辿り着きそうもない。（究極の「目的」は、アリストテレスの「不動の動者」＝「神」のようなものか。）

國分『目的への抵抗』は可能性を秘めた本である。「目的なる語なしでは何かを考えることができなくなっている。目的の概念なしでは仕事をすることもできないだろう。もしかしたら生活もできないかもしれない。」（四頁）それを承知の上で、「目的」概念そのものを批判的に検討する。コロナ禍における「移動の自由」制限に関するアガンベンの炎上した発言がきっかけであったという。

プロセスこそが哲学的思考の肝であり、ネタバレをする野暮なこととはしない。暫定的結論は次のとおり。「目的の

ための手段や犠牲を正当化するという論理から離れることができる限りで、人間は自由である。……その意味で、人間の自由は広い意味での贅沢と不可分だと言ってよいかもしれません。」（一九五―一九六頁）國分も自覚するように、生煮えの議論であることは否定できない。

ふつうに考えれば、読書には「目的」がある。ある本を読むこと自体が「目的」である。では、その本を読む「目的」は何か。例えば、仕事の知識を得ることが「目的」であれば、その本を読むのは「目標」に過ぎない。仕事の知識を得る「目的」は何か。ここにも無限度及が発生する。

「目的のない読書」への道筋は二通り考えられよう。

一つ目は、無限連鎖を断ち切ること、すなわち「チェスのためにチェスをする（それ自体のために或る事柄を行う）」（一五二頁以下）こと。

戲言や禅問答のように思われるかもしれないが、二つ目は「本を読まなくてもよいこと」である。これは「読む会」の暗黙の大原則である。

「世界開示性への開かれ」＝「自由」＝「救い」の境位は、「目的のない読書」によって獲得できるのか。「獲得」は「目的」語を必要とする。とすれば、私たちに可能なのはせいぜい「目的のある読書」への抵抗なのか。

本を作る側から (3)

村瀬 謙介 (小取舎)

現在、週二日数時間、若桜街道沿い、それこそ定有堂書店のビルの二軒となりにある、アートスペースからぶるでお手伝いをしている。ここは障がい者の作業所なのだ。利用者がアート制作をし利用者自身が収支化、自立に向かうという施設である。年に一度、鳥取市の市街地を中心に開催される「フクシ×アートWeek」の報告書作成を依頼されて当初手伝っていたのだが、今は利用者の送迎も行っている。

さらに6月からは鳥取大学のCDLでも週数日であるが入ることになった。両者とも助けてほしい!となった時に思い出していただけるのはありがたい。

小取舎は常時二冊以上を進行している。次の出版物は片山長生氏の『闇の中に灯りをく 臨床教育学への誘い』。著者が教職に着くまでの序章に始まり、鳥取西高等学校、八頭高等学校、西工業高等学校、東高等学校、鳥取西高等学校通信制、岩美高等学校、鳥取県教育研修センターでの出来事を克明に綴った内容である。つくづく教員をする方の記憶力はすごいと感じた。学校改革の中で翻弄

される中で、著者が問題を抱える生徒に親身になって伝えていき、生徒もまた「片山さんなら」と信じていく様子は胸が熱くなる。前半の不良による不登校と後半のおとなしい不登校生徒の変遷が、教師生活の長かった著者が書けるところであるが、生徒の理由がどの時代も共通している箇所も見逃せない。当時の教育方針から考えてわりとぶっ飛んだやり方をするので同僚や上司からは煙たがられていたことには他人事ながら(失礼ながら)笑いながら読ませてもらった。

さて、片山氏は最初の打ち合わせの際、タイトルを既に決められており、さらには装丁にもイメージを持っておられた。黒色の背景にタイトル文字と、内容に直接的に関係する体験学習の時の画像を入れて欲しいという。内容も読ませてもらい、そのタイトルと表紙のイメージが少し暗いな……と正直思った。著作以外の別の本で感銘を受けた言葉も載せて欲しいという希望もあったが、流石にそんな本はみたくないので突っぱねた。説明の上、理解していただけたが、家族にも相談したが、私と同じ意見で「灯りを」とは言っているが「闇」という字を使うと途端に暗くなる。そして臨床教育学の臨床という言葉が医療関係の本なのかなと思うとの感想も。確かに。しかし、著者がどうしてもということなので頭を

悩ましていた。表紙は平積みで並べた時に目を引くかどうか、かなり重要な顔である。平積み段階を終え、書店の棚に差し込まれた時には、背表紙の色味とタイトル、そしてフォントが重要になってくる。鳥取県立図書館で黒がベース色になっている本を片っ端から探し参考にしてよとすると、重い歴史の本や小説でいうとサスペンスが多い。どうしたものか。

片山氏との何度目かの打ち合わせの際に自分の中でだけ閃いたアイデアがあった。それは黒いベタ塗りの背景の代わりに夜空の写真を使おうと思ったことである。そこで日中、本書に登場する浦富海岸や熊井浜あたりに行った。熊井浜への道は日中でもママシやハチに注意と看板にある通りに危険で足元も悪い。抜けてしまえば完全ブライベートビーチのような砂浜が広がっていた。「これ、夜に行くのは無理だな」と思い、別日の夜に熊井浜への入り口前にある駐車場で星空を撮ろうと思ったが上手に撮れない。肉眼では星はちらほら見えるのだが、画像を見ると真つ暗。これでは黒ベタ一色と変わらない。どうしよう。

その時、母が言った「あんた、絵が上手いだけ描いたら？」という言葉思い出した。絵が上手いといっても絵が入選したのも小学生の頃だし、自分の音楽活動（D

J）のチラシ作成の時に描くくらいなもので絵描きさんからしたら大したものではないのだが、思うと確かにイベントチラシにも、装丁に通ずるものがある。つまりはこういうこういうイベント（本）ですよ、あなたのためのものでですよという顔をどう作るべきかはよく知っていた。

そうと決まればすぐに画材屋さんに行って事前からふるさんから聞いたおすすめのアクリル絵の具を買い、表表紙、背表紙、裏表紙にまたぐ絵を描いた。描くものは星空と海岸線。日中に撮った熊井浜の画像を元に想像で夜空を描いた。久しぶりに描いた絵とは思えないくらい良い出来栄え。技法を教えてくださいましたYouTubeさんありがとう。この絵を取り込みタイトルや写真を載せた。フォントは柔らかい感じを出したくて筑紫A丸ゴシックに決定。

次の打ち合わせの段階で片山氏に見せると花丸をいただいた。花丸をいただけたのも生徒になった気分が嬉しかった。

・片山長生著『闇の中に灯りをく』臨床教育学への誘い〜』

小取舎より令和五年六月十一日発行

・定有堂書店「読む会」の展開ー街の読書運動の可能性ー

令和五年六月二五日午後一時半より鳥取県立図書館二階大研修室

汽水のほとりから (27)

小原 修治

(県立高校教諭 湯梨浜町松崎在住)

先日、日本海新聞に三砂慶明さんの手になる岩田直樹著『橋田邦彦・現象学・アーレントの再解釈』（小取舎）の書評が掲載された。一読し、今年三月に三砂さんがこの本の読書会を開くため来鳥し、私も奈良さんの誘いでそこに参加したことを思い出した。春の日の午後、会場となった環境大学の5階にある研究室から眺める桜は美しかった。

今回の書評もそうだが、読書会を三砂さんは橋田邦彦に言及することから始めた。戦前、倉吉に生まれた橋田は、東京帝大教授、一高校長を歴任し、戦時中は文部大臣まで務めたが、A級戦犯に指名されて自殺し、戦後は一転して忘れ去られた人物である。そんな彼に同県同学出身の著者があらためて光をあてた労を三砂さんは多とする。また、書評に言うように、橋田の思想は本書の出発点でもある。が、それは一体どのような意味でそう言えるのだろうか。

三砂さんの配慮で、読書会では参加者全員がそれぞれ感

想を述べたり印象に残った箇所を話題にしたりしたが、その際に奈良さんが指摘したのが「他者問題は近代哲学の喉元に刺さったとげである」という第二章の一節だった。これは本書の主題が「他者問題」にあることを言い当てたもので、橋田の思想が本書の出発点である意味もこの点にあるはずだ。著者が言うように、「他者問題」は現象学を唱えたフッサールにとってクリアにすべき主題だったが、橋田はこれに言及することなく、「自然」と合一する道を選んだ。何故に橋田は現象学を斥けたのかを論じる著者にとって、「他者問題」はまさに両者の思想の分岐点である。確かに、橋田の思想に「他者問題」は存在しなかった。しかし、「主客一如」等を説いた橋田に「他者」の問題がなかったわけではない。むしろあったからこそ、「人生即自然」の全体性においてそれを把握できると考えたのだ。問題はこのように彼が外部である「他者」を安易に内部に取り込んでしまったという事態にあると言えよう。ただ、思想や哲学がどこまでも内省によるものであれば、それは洋の東西を問わず、避けられない事態であるとも言える。独我論 solipsism という哲学用語があるが、近代哲学の祖とされるデカルトや現象学を唱えたフッサールらもまた、この系譜上にあるとされる。「他者問題は近代哲学の喉元に刺さったとげである」という本書の主題に言及した一

節も、まさにこの意味で根底から問い直されるべきだろう。

私の知る限り、「他者問題」を最もラディカルに論じたのは、80年代の柄谷行人の一連の論考である。例えば、彼はこう言う。「フッサールは、彼の独我論がとりあえず方法的なものであって、モノドとモノドの共同化、つまり共同主観性によって、それが克服されると考えている。しかし、むしろフッサールの欠陥は、超越論的自己が「唯一の自己」であると考え、それが「他なるもの」に先行されていること、あるいは差異性としてあるということを見なかつたところにある。そうであれば、それは究極的に独我論を出られない。なぜなら、自己によって構成されるような他者には、他者性が欠けているからだ」（『探究Ⅰ』講談社学術文庫）。他者性とは、「他者」の不可知性である。

私は数年前から月に一度の『論語』を読む会で伊藤仁斎の『論語古義』を読み進めているが、仁斎の朱子学批判の核心も「他者」の問題にある。朱子の説く「理」は「他者」を消してしまうからだ。が、そもそも仁斎にとつて『論語』を読むという行為自体、孔子という絶対的な「他者」との出会いを意味した。彼の朱子学批判はその体験から自ずと立ち頭れる。『論語』の注釈書『論語古義』が何度も書き改められたのは、孔子が不可知の「他者」だからである。理解し終えれば、孔子の他者性は消えてしまうのである。

橋田邦彦は朱子学左派の陽明学を奉じ、『正法眼蔵』を研究し、西欧近代を超克せんとした。「しかし、東洋哲学も結局「哲学」である。これもまた、対関係としての他者を排除するところに成立している。どこでも、内省——すなわち自己対話——弁証法——から出発する思考は、その結論がイデアであろうと空であろうと、独我論（モノローグ）であるほかない。いうまでもないが、東洋のブッダも孔子も、そのような独我論をイロニカルに否定することによって、あるいは主客未分の純粹体験といった神秘主義をイロニカルに拒否することによって、ひとを《他者》に向かい合わせようとした。単純にいえば、彼らは「他者を愛せ」といったのだ」（柄谷行人『探究Ⅰ』講談社学術文庫）。

「他者を愛せ」とは「倫理」の問題である。「他者問題」もそこに帰結しよう。なぜなら、「他者」は不可知であり、誠実に向かい合い続けるしかないからだ。「他者問題」を主題とする岩田氏の著作が「生活世界」「公共性」を経て、最終的に他者性に向き合うレヴィナスやセンを取り上げ、「倫理」で幕を閉じるのは、その意味で正しい帰結である。

『東京物語』を読み解く

萩原 俊郎

(倉吉市在住者)

「知り合いが亡くなって、気が付けば友人も残りわずか。長生きも考えものねえ。先に死んだ方が寂しくなくて良かったかも」と、89歳になった母親がこぼす。

長生きすればしたで、つらいこともある。そんな心情も察して、岡山で独り暮らしの母親を車で迎えに行き、温泉やお気に入りの地ビールの店に連れて行ったりしているが、この89歳、1パイントの大ジョッキの黒ビールを軽々飲み干して地ビールの店主を驚かせるなど、まだまだ元気、先は長そうである。ひよっとすると、私の方が先に「おさらば」かもしれない。

そんな母親を連れて、近く上京する計画を立てている。昨年、鳥取の安定した仕事を捨てて東京に転職した私の次女と、横浜にいる三女が産んだ2人目の「ひ孫」の顔が見たいと言うのだ。年齢だけに、旅に心配がないわけでは

ない。そんな折ふと小津安二郎の『東京物語』のことを思い出し、久しぶりに観てみようと思った。

◇ ◇ ◇
世界が認める小津監督の代表作。東京で暮らす子供たちのもとに尾道から夜行列車で年老いた両親(笠智衆、東山千栄子)が訪ねてくる。多忙な子供たちは適当にあしらうが、血のつながっていない戦死した息子の嫁(原節子)が実の娘以上に2人をかいがいしくもてなす。

◇ ◇ ◇
これまで何度も観た。「小津調」と呼ばれる静謐な描写の中から、親子の持つ残酷さ、解体される戦後の家族関係が浮かんてくる…というのが大方の評価で、私も長くそう思ってきた。「悪者」はドライで現実主義者の東京の子供たちで、原節子は「聖女」である、と。

◇ ◇ ◇
ところが今回観て、ふと開業医の長男(山村聰)、美容院を営む長女(杉村春子)という2人の「仕事」に引っかかった。どちらも東京でなくても、尾道あるいは広島でも成り立つ仕事のはずだ。なぜ長男、長女は東京に出ることになったのか。

◇ ◇ ◇
そこで、少し2人に味方して映画を観ることにした。

◇ ◇ ◇
東京の開業医とはいえ、長男の内科・小児科医院は郊外にある自宅兼用、妻が助手という質素でつましいものだ。

しかも親を東京の観光に連れ出す休日にかかりつけの子供の容体が悪いと聞いて躊躇なく往診に出かけてしまう。彼は実は「すばらしい町医者」なのだった。

「誇るべき息子」なのに、酔った父親は旧友にぼやく。『俵はもうちつと何とかなってると思ってた上京したら、場末のこまい町医者、わしは不満じゃ』。子の心、親知らず。尾道の元教育課長で、誰の目にも実直、好々爺に映る父親の「もう一つの顔」が次第に見えてくる。

それが明確になるのが、美容院を営む長女の怒りだ。泥酔して警官に連れられて帰った父親の姿に「だから酒飲みは嫌い。昔、どれだけお母さんが泣かされたことか」



長男と長女が金を出し合い、2人を熱海の旅館に送り出したのを「体よく親を厄介払いした」とよく解釈されるが、多忙な中で精いっぱい親孝行だったのでは、と今の私から思う。母親の葬儀で形見をねだったり、ズケズケものを言う長女だが、それぐらいでなければ、花の東京で弟子のいる美容院など切り盛りできない、

「すまんのお」「そうじゃった」。むしろ笠智衆の枯れた演技に、映画を観る者は騙されるのだ。昔は仕事ばかりで家庭を顧みない大酒飲みの父親だった。それを嫌い、子供たちは遠い東京に出て行った。家族をかううじてまとめ

てきたのは夜行列車の疲れがたたって急死した母親の方だ。母親の葬儀で「こう言っちゃなんだけど、お父さんが先の方が良かったわねえ。お母さんなら東京に来てもらって何とかなるのに」と長女はつぶやく。



静かだが、かなり残酷な映画でもある。原節子演じる亡き息子の嫁は、こうした昔の義父や家族のいざこざは知らない。年老いた夫の両親は、失いたくない夫の思い出と自分をつなぐ接点。だから、ひたすら優しいのだ。

戦後になっても日本は変わらず、「男は仕事、女は家庭」「飲む・打つ・買うは男の甲斐性」だった。むしろ経済成長下の企業社会でさらに助長されたと言っている。若者は親のいる窮屈な田舎に見切りをつけ、東京に向かった。映画で長男は夫婦助け合って小さな病院を、長女は女手一つで美容院を営んでいる姿はどこか象徴的だ。

ラストシーンで、父親は尾道の家で独りぼつねんとたたずむ。自ら招いた因果ではあるが……。『お前の中にも、この父親の姿はないか』と問われれば、私も少々心が痛む。さあ、母親を連れて東京へ行く。今では岡山から東京へは、新幹線でわずか3時間の旅である。

定有堂教室案内サイト (@ドラメリア)

定有堂教室「読む会」 (岩田直樹氏 選書)

6月22日 木曜日 19時から

テキスト 望月雅士『枢密院』 講談社現代新書



定有堂教室「ドウルーズを読む会」

(講師) 岩田直樹氏 公立鳥取環境大学特任教授

8月17日 木曜日 19時から

定有堂教室 「読書室ピオトープ」

小説を読む会です 19時半から

6月15日木曜日 第二回テキスト『密やかな結晶』

〔太極拳教室(会場 定有堂二階・他二カ所) 葉香クラブ

毎週 水曜 十九時半から ・土曜 十三時半から

講師 日本武術太極拳連盟 四段 公認A級指導員

三段 公認B級指導員



岩田直樹『橋田邦彦・現象学・アーレントの再解釈』

―生活世界における公共性と倫理― 小取舎 2023

一八〇〇円本体

橋田邦彦・現象
学・アーレント
の再解釈
岩田直樹



『生活世界における公共性と倫理』



ISBN 978-4-80349-1-0-0

9 784803 491000

ISBN 978-4-80349-1-0-0

9 784803 491000

橋田邦彦・現象学・アーレントの再解釈

―生活世界における公共性と倫理―

岩田直樹

小取舎

橋田邦彦・現象
学・アーレント
の再解釈
岩田直樹

小取舎

消えゆくお店 続々

ムラカミヒロミ

(フライング・ブックマン)

また、ひとつ、昭和の建物が姿を消した。この所、加速が掛かっているように感じるのは、気のせいだろうか。

本町通りを歩いていたら、ちよつと風情のあつた建物がなくなつていた。門前に松の木があり、黒瓦に白壁、黒の腰壁という非日常的な雰囲気を漂わせた数寄屋風の造りであつた。

高級料亭だつた家である。店仕舞いしたのは、もう何年も前だが、屋号を取り去つた建物はそのまま残つていた。

一月くらい前に、中の道具類を運び出しているのを見て、いよいよ取り壊しか、と思つていたら、程なくして解体が始まつた。前半分がなくなつた所で、小さな坪庭が見えた。そして、昨日通りかかると、上物は完全に無くなつていて、これから整地に取り掛かる、というタイミングであつた。敷地を見ると、間口こそ狭いものの、奥行きがあり、昔ながらの町屋造りであつたことが分かつた。

思えば昭和五十年代、小人数での飲み会は、大抵このような料亭だつた。職場の上司が大正世代だつた時代である。室礼など細かなことは忘れてしまつたが、十畳かもう少し広いくらいの部屋で、二、三人の仲居さんが付いた。料理の配膳や、酒の酌、話の相手を務め、時には三味線を取り出して奏でたり、歌つたり、お座敷遊びをしたりした。(流石に、投扇興のような雅なものではなかつたが、藤八拳やもう少し品下るものはあつた)

この他にも市内には数件の料亭があつた。昭和の半ば頃の電話帳を見ると、本町筋の料亭が数多く載つており、ちよつとした料亭街として賑わつていたことが忍ばれる。今でも、気を付けて眺めてみると、住宅に改装されてはいるが、元は料亭だつたのだなと察せられる建物が散見される。

余談だが、全国から大勢が集まるような、規模の大きな会合などを催した時、夜の懇親会には、接待役の女性を依頼したものだ。コンパニオンなんて名は未だなくて、雇女(やとな)さんと呼んでいた。

これも昨日のこと、相生町にあつた終戦直後の生き残りのような(実際は、火事後の三十年代くらいだと思つた)

木造モルタル造りの二階建てアパートの取り壊しが始まっていた。

子供の頃は、こういったアパートは、あちこちにあった。友達の家がそうだったこともあるし、学生アパートや独身寮なども似たようなものだった。

雰囲気としては、漫画家の梁山泊としてよく知られたトキワ荘のイメージに近い。靴脱ぎの玄関があり、まっすぐ廊下を通り、左右にドア（引き戸のこともあり）が並んでいる。風呂なし、トイレは共同。台所は共同だったり、個別に流しとガスコンロくらいは付いていたり。三和土が、そのままコンクリートの廊下になり、各部屋は小上がりのようになっているタイプもあった。

筆者の知っている昭和四十年代の独身寮は国鉄のもので、映画「裸の太陽」（SFに非ず。若き日の仲代達矢が出演していた鉄道映画である）に出てくるものにそっくりだった。木造二階建てで、個室のドアは引き戸だったが、共同の風呂は付いていた。鉄道員だから汗仕事だし、町内に銭湯がなかったせいかも知れない。電話室（建物の中に電話ボックスがあるとお考えください）などもあった。

湖山界限には、こんなタイプの学生アパートが散在していた。玄関に入ると、これ履けるんかいな、と思うような運動靴やらサンダルやら下駄やらが脱ぎ散らかされ、重なり合い、隅の方のは砂を被っている。横にある上げ蓋式の下駄箱を使う者などいない。これを見ただけで、御婦人方は回れ右をするだろう。

廊下には、（好ましがらざる）雑誌の束が積んであり、バケツが転がり、衣類だか雑巾だか分らぬものが落ちており、歩けば、点々と足跡が付くような埃塗れの有様なのであった。こちらは、大森一樹の「ヒポクラテスたち」を思い出していたかとよい。

今は、小洒落たワンルームマンションばかり。昭和も遠くなりにつれ、である。

鳥取あれこれ その八十二

内田 克彦（地域研究家）

（承前）二〇〇八年刊の朝日新聞「新聞と戦争」取材班著『新聞と戦争』の「はじめに」に、「前ゼネラルエディター 外岡秀俊」による次の記述がある。

きっかけは一通の投書だった。「略」私が2006年春、日々の紙面を統括するゼネラルエディターにという職に就いて数か月後、一通の手紙に視線が引き寄せられた。「私が小さな頃、祖父が口癖のようになんと言っていたのを思い出します。朝日の論調が変わったら気をつけろ、と」。

同著第7章は阿久沢悦子記者執筆の「女を集める」である。

新聞購読者に女性を取り込まない手はない。大阪朝日新聞は17（大正六）年、日本初の「本格的婦人欄」を設けた東京・読売新聞から恩田和子記者を引き抜き、女性の組織化に乗り出した。

当時、最大規模の婦人団体は、奥村五百子が一九〇一（明治三四）年に設立した「愛国婦人会」であった。ところが、軍事後援や軍隊慰問を目的としたはずの愛婦は、「会の中枢部が知事夫人を支部長にした県支部幹事会にあ」り、「そこに集まるのは地方名流夫人で、会合自体が一つのステータス・シンボルですらあった。」また、「愛婦の組織は本部と府県支部が事業主体で、各市町村の位はたんに会費を集める組織にすぎない」のであった。（藤井忠俊『国防婦人会』）

そのため、この全関西が各地域で女性団体の結集をはかることにより、会員三百万人の団体となり、先に述べた通り、一九二五（大正一四）年一〇月の代表者会で婦選請願を決定し、東京の「婦選獲得同盟」と連携して精力的に活動していくのである。

その一〇月の代表者会における鳥取県関係者の模様を、一九二五年一月号の『婦人』から引用する。

まず、会員の五分間演説の際、鳥取高女翠紅会 北野よし子が「始めて本会に臨みて」と題して、次のように発言している。

権利を叫ぶには、各自がその権利を獲るやうな運動をしなければならぬ、この点は関東の婦人方は相当進んでやつてをられるやうでありますから、われ々、関西の婦人も大に自ら進んで権利を獲得するやう努力せなければならぬと思ひます。

さらに、「代表者の感想」欄に、北野が「実力の養成」と題して、次のように寄稿している。

世界の文明諸国のうちで女子が参政権を獲てゐるのは日本とフランスばかりでありますから婦人参政権の獲得運動も必要であり、私も賛成者の一人であります、それを叫ぶ前にまづ女としてなすべき幾多のことをしつくし、實際社会を動かすだけの力を養成しなければなりません。

加えて、鳥取県米子町婦人会、清家良子も「驚くほど組織的」と題して、寄稿している。

なお、鳥取県連合婦人会が、田寺よし子により提案した議案は「我国従来 of 衣服地販売法を廃して切売制度に速かに改善するには如何なる方法を採用すべきか」であつたが、座長は参考案として研究に止めたいと述

べ、起立採決に問い、原案賛成一人もなく、研究案に止まつてしまつてゐる。

同じ号には、一九二四（大正一三）年一月一二日の久松幼稚園での「鳥取連合婦人会」、翌年二月二日の鳥取高等女学校での「鳥取県連合婦人会」による母性会並びに母性向上の講演会、六月二六日の鳥取県立高等女学校での「鳥取県連合婦人大会」による山榎代議士の「婦人問題について」等の講演会の記事が載つており、同年の一二月号には、一月二二日の鳥取市婦人連合会主催の婦人経済講演会の記事が写真付きで載つてゐる。

一九二六（大正一五）年の一月月号は、「第八回連合婦人大会号」であり、鳥取連合婦人会から、「地方婦人会に於て各地方婦人の副業を調査して逐次これを機関雑誌『婦人』に掲載すること」「遊学せる学生生徒の適當なる保護監督の方法如何」の二議案を提案しており、「代表者会出席者名簿」には、鳥取県代表として、佐野とき、田中かね、高橋さく、中井清子、中村松子、国広文子、中尾順子、島雄きう、入江うた、吉田伴代の名が挙がつてゐる。

（以下、続く）

二〇二三、五、二五

八代日記

(三十九)

齊藤 仁昭

(ケバブジョンソン・

元長崎書店)

五月某日

階段を少し駆け上がったり、重い荷物を上げ下ろししたりするだけで息が切れて鼓動が早くなり、胸が苦しくなるようになってしまった。息切れでハアハア言っているのを見られるのも気恥ずかしいし、心配もされたくないので、職場での動作を遅くしてしまう。会社から帰宅するのに1時間半の運転をしないで済まないの、取り掛かり始めた仕事も中途半端に切り上げて、体力を温存しようとして拗らない。

最近はずいぶんの途中でも体力が切れそうで、最後まで演奏できるか不安になることがある。不安になるとそのことばかり考えて演奏に集中もできなくなってしまうと悪循環。今月十四日には大事なライブもあるし、夏には大阪・名古屋・神戸も決まっている。

一念発起。トレーニング用のアプリをアイフォーンに入れて、1年間のサブスクリプションに申し込んだ。一念発起でアプリするのも情けないような気がするが、あまり考

えずに体を動かして始めてみよう。

元々三日坊主だし、最初に気合を入れすぎたり考えたりしすぎて継続ができないタイプなので、細く長く続けることを目指したい。

アプリに目標の体重や筋肉の付け方を設定すると、日替わりのメニューが作成される。メニューはいろいろな種類のアクティビティから構成されている。

有酸素運動、ストレングス、ストレッチ、ヨガ、ピラティス、ファイトフィットネス、リカバリー、ダンス、ウォールワークアウト、リビドーアップ(こんなのあるのですね)、ウォーキングなどなど。

筋トレといえば腕立て伏せと腹筋とスクワットくらいしか思いつかなかったのだが、そんな時代は過ぎ去ってしまったのかトレーニングは現代的に進化していた。動画で再生される先生の手本を見ながらプラクティス。

こんな体の動かし方でこんな部分にこんな負荷がかかるのか、という発見が楽しい。そもそも体の使い方に偏りが出てしまっているのだろう。全く動かせない部分の発見も楽しい。楽しいが息が切れる。しかし息が切れることが運動している実感となつてうれしい。

今のところ、二十日間くらい続いている。(飲んだ日とライブの前日と当日は休んだ。) 体重はまだぜんぜん落

ちていないし二の腕や下っ腹もぶよぶよしたままだが、動作に踏ん張りが効いて、ああもうめんどうくさいから明日でいいや、と思う回数が減ったように感じる。頭も何だかスッキリしているような気がする。これが習慣のチカラなのだろうか…。

アプリのおまけで食事のレシピや摂り方の説明もあるのだが食べ物にも気を遣っていききたい。が、あまりストイックにならないようにいこう。

五月十三日

十四日のライブに向けて東京へ出発。羽田に着いてから練習スタジオの集合までまだ時間があった。どうしようかなと考えて、久禮さんが本屋を開いたのを思い出し、東急目黒線不動前駅のフラヌール書店へ向かう。

初めて降りた不動前駅、下町感があって良いところ。駅から5分くらいのところにお店があった。久禮さんは開店にあたり何とほとんどの書棚を自作したそう。とても上品かつ使いやすそうな棚だった。ローマ的なテーマでコーナーを作るのが上手だったけど、実際のローマも上手だった。

棚の中身も素晴らしく、定有堂の棚がお好きな方には是非見ていただきたいです。人文書、もしくは人文的なもの

がテーマの中心にあるけれど、そこから繋がったり飛躍したりしながら四方八方へ広がる宇宙。かつ購買欲もその棚。棚作りで僕は全く勝てる気がしません。足元にも及ばない。

以前も書いたが、久禮さんは僕が大学時代に通っていた本屋の店員さんだった。その本屋でいろんな本を買ったり立ち読みしたりして本屋の奥深さというか底なし沼を知った。その時は僕が一方的に彼のことを認識していただけで会話をしたこともなかったし彼の名も知らなかった。いつも行く好きな本屋の店員さんとして顔を覚えていただけだった。

何年も経ったのち僕が本屋に勤めはじめ、社長が社員教育のために連れてきたコンサルの人が彼だった。なんだか見たことがある人だなーと思って話してみるとあゆみブックス早稲田店にいたとのこと。うわー大学よりあそこに長く通ってました、久禮さんの顔とか立ち姿覚えてますよ、うわーいい、という再会？だった。それ以降数ヶ月に一度コンサルとして来熊してくださり、棚の作り方や本のこと、出版社のことなどたくさんのことを教わった。

手土産も持たずに寄ってしまった。次は忘れずに持っていこう。

鳥取になんか誰も来ない

鳥取に来た友人と映画監督の話

三浦 永理

(青翔開智中学教員)

ゴールデンウィーク、東京から二泊三日で友人が来た。コロナ前以来、会っていなかったの、ボブヘアだったのに、長い髪をなびかせながら空港に現れた彼女を前にして、時の流れを感じた。

翌日、朝早く鳥取砂丘に向かった。青空の下、海に向かって車を走らせる。無料駐車場を開放している「見晴らしの丘」に登っていくと、すでにかなりの台数がとまっていた。おそらく、この日のためだけに増員された誘導の指示に従って、車をとめる。車内で、日焼け止めを入念に塗る友人を待っている間にも、「なんば」「京都」「宇都宮」さまざまのナンバーの車が入ってくる。はじめての風景だ。

まず、「見晴らしの丘」に上がり、何もなし砂丘を見た。 「思ったよりも…ちゃんま、」

と友人に言われる。時々、ゴビ砂漠みたいなものを想像してくる人がいる。幸か不幸かそんなことはない。

結局、その友人も砂丘に着いた頃には、それなりに驚いて、吹き荒れる風にきちんと整えたはずの髪を乱されながら、歩いた。一方で、私が驚いたのは人の多さだった。普段は、違う惑星に来たような気持ちになれる不思議な場所だ。人はまばらで、風の音だけを聞くのにちょうどいい。だが、この日はあまりに人に溢れて、いつもの砂丘の雄大さ、異世界感が一気になくなった。コロナ禍が、制度的には終わりを迎え、コロナ以前の「観光地・鳥取」を垣間見た瞬間だった。

移住して以来、私は友人たちから苛烈な「鳥取いくいく詐欺」にあっている。誰も鳥取になど来たりしない。

私が逆の立場でも、きつと東京からわざわざ来ないだろうと思う理由のひとつが、交通の便の悪さだろう。大阪などから二時間以上かかるとなると、何かのついでに行くということが難しい。結局、東京から飛行機に乗るのが早いのだろうが、飛行機代は安くはない。東京の友人はほとんど車持ちではないので、車で来いというのも野暮だ。

「今度関西行くから行こうかな」

「三日くらい休みあるから旅行しようと思って」

これに騙されること、数えきれない。二十代は、鳥取に来るには、忙しすぎる年齢かもしれない。

今回わざわざ来てくれた友人には感謝している。その友人は、明るく朝、特急のはくりに乗り、京都に向かつて行った。もしかしたら、鳥取旅行は、それに向けた前菜に過ぎなかったのかもしれない。

そんな鳥取のJig Theaterに、三宅唱監督が来るというのだから、このゴールデンウィークは、私としては一大事だった。この春の日本アカデミー賞で、岸井ゆきのさんが主演女優賞を受賞した『ケイコ 目を澄ませて』の監督である。遠路はるばる、今一番注目されている監督が鳥取に来てしまうのだから、と特集上映に通う日々が続いた。

『ケイコ 目を澄ませて』の主人公、ケイコは、今まで見た映画ヒロインの中で、一番すんなり観ることができた主人公だった。無論、私はボクシングのように体を限界まで酷使することとは縁遠い。けれど、彼女は真剣にボクシングに向き合っていて、恋愛も入ってくる隙はなさそうだ。ケイコ自身は聴覚障害者だが、そこでお涙頂戴の展開にはならない。それでも、物語としてきちんとならしている。果たしてそんなヒロイン映画があったのだろうか。

そんな彼女の「切実さ」に自分は心打たれたのだろうか。そこから、三宅監督の『無言日記』を観て、一緒に観た人たちと「自分たちでも動画で日記やってみようか」と盛

り上がったたり、『ワールドツアー』のドキュメンタリーとフィクションの狭間の青春劇に心躍らせたり…。特に、『Playback』では「差異の反復」とでもいうべきドウルーズの世界観が広がっていた。

友人を見送ったその日、三宅監督のトークショーを聞きに、松崎へ向かった。

その中で私が膝を打ったのは、ある人間を描くために物語があつて、逆ではないという監督の気付きだった。そのために、それぞれの人物の「切実なところ」を物語にする。「料理という器」だと。ある人物を語ろうとして、必然的に物語になってしまった。そんな風に自分も、物語と、人と向き合えるのだろうか。気楽に消費して、気楽に吐き出すだけの人間になっていないだろうか。（それに気付かされたのが、生活費のために短編を書き続けたフィッツジェラルドの『若者はみな悲しい』というのがまた憎い。）

三宅監督が最初に鳥取に来たのは、初めての映画祭の賞金を手に鳥取在住の友人に会いに行こうとして、その友人が米子にいた挙句、真つ暗な砂丘を歩き続けて時間を潰した時だそう。

砂丘には、やはり何かある。

おみやげ

あきの素生

(くうねるめがね)



五月連休とその後の新型コロナウイルス感染症の五類移行で、予想していた以上に世間も自分もするするほど増えてきたように感じる。ウイルスや私たちの体が変わるわけではないことも理解しているけれど、もうじゅうぶん、おなかいっぱいで、飽き飽きして、うんざりしていたのだ。マスクをしないまま外を歩くときのあまりにも晴れ晴れとした気持ち、これまで感じていた罪悪感の存在を教えてくれた。屋外で人がいないところではマスク無しでも問題ない、と割り切っていたはずが、けっこう気にしていたのだなど苦笑した。

他地域との往来がますます活発になって、おみやげをもろうことも、選ぶことも増えてきた。京都の阿闍梨餅、博多通りもん、高知のかんざし、伊勢の赤福などなど、もうと小躍りしたくなるほど大好きなおみやげたちを、また

口にできる日もそう遠くはないかもしれない。「お取寄せ」という手段もあつたなあと今更ながらに思いついたが、もつと食べたいと思いつながら、ひとつつまむくらいがちょうどいいのだ。きっと。

久しぶりに会う家族や友人へのおみやげ選びは、ついつい気合が入り、えらく時間がかかった。あの人はこのお菓子が好きだったな、この品はまだあげたことがなかったから今回はこれも、食べたことがないとなかなか勧められないし細々と買って帰って自分も食べよう、あ、見たことのないおみやげだ、などと選んでいると、スイーツケースの半分以上がおみやげで埋まってしまう。前もって送ればいようなものだが、なんとなく自分で持つて帰りたくなるのが不思議なところだ。どこで見たのか定かでないが、紐でくくった折詰をぶら下げて「おーい帰ったぞ」と千鳥足で帰ってくるお父さんというあのお定まりのシーンの影響もあるかもしれない。

小さい頃、父親の勤めている会社では、毎年社員旅行があった。「お父さんは仕事で遠いところ出張に行くんだよ」という説明を長い間真に受けていて、その実態が単なる旅行だと知ったときは、裏切られたような気持ちになっ

たものだ。だからこそ隠していたのだろうが。本当のこと
がわかってしまえば、仕事だろうが遊びだろうがどちらで
もよくて、大きなカバン（スーツケースだったろうか）か
ら出てくるおみやげに寄せる期待に変わりはなかった。異
国情緒あふれるやたら大きなお面や何だかよくわからない
レリーフ、木彫りの置物、ご当地の人形やぬいぐるみなど、
おみやげでなければ家にやって来ることもなかっただろう
ものたち。今もわが家の至るところに置かれ、おしゃれと
は無縁の混とんとした雰囲気醸し出しているが、初めて
見たときのわくわくした気持ちはそのまま残っている。旅
行が終わって疲れて帰るのに、かさばるものをわざわざ買
い込んで自ら運ぶのは、今ほどみんな旅慣れていなかった
からだけではなく、家族の喜ぶ顔をすぐに見たいという理
由が大きかっただろうと思う。子どもは子どもで、いつも
食べているものとは違う味わいのチョコレートだけじゃな
く、数日いなかった父親が帰ってくるのを待っていたのだ。
照れくさいから口には出さなかっただろうけれども。もの
が行き来するだけでない、その人が持って（帰って）来る
から特別。おみやげってそういうものなのだなど改めて感
じる。

ではあるのだが、回数を重ねてくると、なにか言われた

わけでもないのに、いつも同じものというのも、とバリ
エーションを求めて勝手に右往左往してしまう。そんな
ときは、スーパーで日常の料理に使える食材や調味料など
を調達する。誰に対しても渡せるおみやげではない。好
き嫌いはもちろん、普段どんなものを食べるのか、料理を
する人かなどを知っていないと選べない。そういつたおみ
やげを渡せるくらい親しい人たちと、離れて暮らす自分が
同じ味のを食べることができるのはなんともうれしい。
渡す相手より、自分の方が喜んでいたりするのかもしれない。

お気に入り3品
お土産 さあて：ハワイの人形



（イラスト・あきの素生）

パジャマの誘惑



ドラメリア (座敷わらし)

先日、退職される先輩に贈り物をした。ご本人の希望を聞いたところ、間髪入れずリクエストが返ってきた。「わたし、いいパジャマが欲しいわ」

むむ、パジャマ。予想しなかった単語にしばらく考え込んだ。ノーマージ、ノーマイデア。自分のために買ったことも贈り物にチョイスしたこともない品物だ。そもそも、いわゆるオーソドックスなパジャマを着ることがほとんどない。何かあったときにそのまま外に飛び出しても恥ずかしくないよう、部屋着で寝ている(内外兼用にはしていないが)。パジャマと言われて思い浮かぶのは、実家の父親が十年近く着続けているくたびれた甚平もどきか、ビジネスホテルで着るシンプルなものぐらい。さて、退職祝いでできるちよつといいパジャマってどんなものがあるのだろうか。乏しい予備知識を携えて、ネットの海で情報収集に励んでみることにした。

その結果わかったのは、今やパジャマを含むナイトウェアは一大市場らしいということだった。「睡眠の質を上げ

る」「リカバリーウェア」と己のパジャマ観を覆す単語が躍り、シルクに麻、綿にサテンと素材もよりどりみどり。なんと天然鉱石を混ぜ込んだ高機能のものまであるらしい。パジャマ道は奥が深いようだ。

とんと興味がなかったのに、あれこれ品定めしているうちについ欲しくなり、ふらふらとちよつといい素材のものを一着買った。わくわくしながら身につけて、これで睡眠の質も爆上がり!と夢想したところで、飛びついてきた猫にはたと現実に戻る。鋭い爪、飛び出る糸。

そうだった、わたしが自宅でもいい素材を着ないのはきちんと理由があったのだった。



・編集後記……

・松江のお菓子「路芝」(みちしば)をいただきました。松江の全国大会で先輩にいただいた思い出の和菓子は、記憶通り甘さ控えめでこまの風味。でも思ったよりみどりいろだった。

ドラメリア (編集長)

・定有堂書店の神話的刊行物『伝えたいこと』に「猶、後哲を俟つ」という言葉があります。ノンフィクション作家の石橋毅史さんが拾い上げてくださいました。

奈良敏行(発行人)